近世後期の小倉藩郷御蔵所の空間構成に関する研究

STUDY ON THE SPATIAL STRUCTURES OF GO-OKURA-SYO OWNED BY THE KOKURA DOMAIN IN THE LATE EDO PERIOD

相模 誓雄^{*1}

Chikao SAGAMI

The purpose of this study is to identify the characteristics of spatial structures of Go-Okura-syo owned by Kokura Domain in the late Edo period. The Go-Okura-syo in Kokura domain consisted of the different buildings with different custodians serving as an enclosure, while a usual type of Go-Okura-syo had buildings arranged in its enclosure. Therefore, the Go-Okura-syo is considered as a unique example in our country's Go-Okura-syo.

Keywords : Storehouse, Premises, Spatial structure

蔵, 屋敷, 空間構成

1. はじめに

近世期、幕府や諸藩は、領内の要衝に御蔵所を設けて年貢を徴収した。豊前国の小倉藩の場合、村の庄屋役宅の蔵に集められた年貢米^{注1)}は、各郡に設けられた御蔵所へ運ばれた。御蔵所は、京都郡は行事村、仲津郡は大橋村や杵尾村、築城郡は湊村付近、上毛郡は八屋村や宇島港、田川郡は5ヶ所にあった^{注2)} (Fig. 1)。これらの御蔵所に集められた年貢米は、水運を用いて小倉城の表蔵^{注3)}へ運ばれた。一方、企救郡の村々は小倉城の表蔵へ直接納入した^{注4)}。御蔵所を「郷御蔵」^{注5)}と記す史料がある。これは、城内の御蔵に対して在郷の御蔵のことを言い表していると考えられる(以後、「郷御蔵所」と記す)。また、当地の郷土史研究では郷蔵と記している。郷蔵は、村々に設けられた年貢米を一時的に保管する共同倉庫である^{注6)}。郷御蔵所には、次に述べる郷蔵の役割を果たす中出蔵もあり、藩民混合の御蔵所と捉えることができるだろう。なお、加賀藩領でも郷御蔵所内に村々の組合の建物があつたが、これは藩政後期に増築された計蔵であつた^{注7)}。

小倉藩の年貢米徴収は、郡方を中心として行われるが、手永と呼ばれる地方行政単位をよく用いるものであつた。手永は多くの村々によって構成され(前記の組合に類似)、これを大庄屋が統括した。手永は郷御蔵所内に中出蔵を設けて、年貢米納入の中継に用いた。一方、各郡には「郡土蔵」^{注8)}と呼ばれる蔵もあり、ここには多岐に渡る費目が納入された。このように郷御蔵所は、藩及び民間の手永によって形づくられていたので、これまで検討してきた諸藩の郷御蔵所とは異なる成り立ちになっていたことが予想される。なお、当地には複数の手永の大庄屋に関する日記や史料群が伝えられている。これらの史料は断片的ではあるが、郷御蔵所の業務や普請などの実

Fig.1 Position of the Kokura Castle Remains and the former sites of Go-Okura-syo owned by the Kokura Domain

態が知られ、貴重である。以上のことから、小倉藩の郷御蔵所を取り上げ、それらの空間構成の特徴を明らかにすることにしたい。なお、領内には「社倉」^{注9)}と呼ばれる貸付や貯蓄のための蔵もあり、小倉藩領内の在郷には様々な蔵所があつたことが特筆される。

小倉藩の郷御蔵所に関する御蔵の建築遺構は見られない。なお、小倉城内の御蔵所については、一部の発掘調査によって建物跡が確認されているが、御蔵所の復元には至っていない^{注10)}。しかし、大橋郷御蔵所(以後、郷御蔵所は名称に山括弧を付けて記す)や〈八屋〉に関する見取図、〈行事〉、〈椎田〉、〈宇島〉に関する絵図史料から藩政後期の郷御蔵所の様子が知られる。なお、支藩の新田藩の郷

^{*1} 仙台高等専門学校総合工学科 教授・博士(工学)

Prof., Dept. of General Engineering, National Institute of Technology, Sendai College, Dr.Eng.

御蔵所に関する見取図も現存するので、支藩との共通性についても言及したい。

2. 既往研究・手順

筆者は、建築遺構が少なくこれまで建築史研究では注目されてこなかった幕府や諸藩の郷御蔵所を取り上げ、主として絵図史料を用いてそれらの建物配置の型式や御蔵の建築構成について検討してきた^{5), 7)-14)}。小倉藩郷御蔵所に関する既往研究は建築史学には見られず、郷土史学で取り上げられることがあった。しかし、建築に関しては史料から知られる実態の範囲に止まっており、その成り立ちや郷御蔵所相互の比較検討はなされていない。一方、本研究は、小倉藩の全ての郷御蔵所を対象とし、その空間構成の特徴を明らかにしようとするものである。まず、郷御蔵所毎に空間構成の実態（立地、成り立ち、敷地囲い、空間構成要素、建物配置）を示す。次に、それらの共通性の検討から、空間形成の規則性及び、建物配置の型式を明らかにした上で、その形成要因について検討する。終わりに、小倉藩において郷御蔵所が特徴的な空間構成を有した原因についての考察を試みることにする。

3. 空間構成の実態

3.1 〈大橋〉

立地：仲津郡大橋村において〈大橋〉は、北東へ向かって流れる行事川（現在の長峽川）河口付近右岸にあった^{注11)}。ここには、国作^{注12)}、長井、平嶋、節丸の各手永村々の年貢米が収められていた。幕末期の「大橋村行事村宮市村見取図」（Fig. 2）において郷御蔵所は、周囲を田畑で囲まれ、行事川に近接している。建物が庭を囲み、その外に牢屋が描かれている。

成り立ち：「国作手永大庄屋日記文政五年（1822）」の1月18日の条、「御蔵絵図面差出候扣」（Fig. 3）には東西2棟の御蔵が描かれている。西の御蔵は、間口4間奥行4間の3室からなり、桁行12間である。東の御蔵の室に3、西の御蔵の室に6～8の番号が付けられている^{注13)}。なお、各室には1ヶ所の戸口が開かれるので、この番号は戸前の数でもある。また、同4月5日の条「奉願覚」^{注14)}に、「大橋 一御米蔵壹軒 長拾貳間横四間但壹貳番三戸前分 右之御米蔵甚損申候而當秋納米御取納難相成罷成候ニ付（後略）」とある。この御蔵は、三番の戸前が見られるので東の御蔵と考えられる^{注15)}。さらに、同8月7日の条「覚」^{注16)}に、「一御蔵御門壹ヶ所 右者大橋御蔵御門は迄壹ヶ所ニ而濱出之節納米付出シ両様混雑仕、（中略）只今之御門ハ其俣濱出御門ニ仕此度新規ニ表御門壹ヶ所明ヶ申度奉願候、（後略）」とあり、表御門の創設が知られる。小笠原文庫「大橋村御茶屋・御蔵所・牢屋・高札場・境石・皆見村一里塚図」の郷御蔵所（Fig. 4）にこの表御門が見られるので、本図は文政5年（1822）以後の郷御蔵所を描いたものと言える。本図にも東西の御蔵が見られるが、東側が4室（戸前番号1-4）、西側が3室（同5-7）であり、東蔵はFig. 3よりも1室多く、番号の振り方も異なっている。弘化2年（1845）に御蔵の収納量の増加が図られている。「国作手永大庄屋日記弘化二年（1845）」、大久保嘉右衛門が大庄屋へ宛てた7月14日の文書^{注17)}に、「一、大橋御蔵之見分相済候哉ニ承り候、其前ニ承り候ハ、東之側之御蔵も振替相願度存居候、殊ニ梁行壹間程延候ハ、別而可宜様存候、西之方も今壹戸前建添相願被申候ハ、

Fig. 2 A part of drawing of Ohashi Village and Gyoji Village, in the last days of the Tokugawa Shogunate

Fig. 3 A sketch of Okuras in the Ohashi Go-Okura-syo in the year 1822

可宜様存居候、定而地盤通りと存候、（後略）」とあり、位置を変えず、東側の御蔵の梁行を長くしたり、西側の御蔵に1室増築したりする方法が取られている。そして、7月29日にこの普請が決定している^{注18)}、実行されたものと推察される^{注19)}。

敷地囲い：文政5年（1822）以後作製のFig. 4に敷地境界線は描かれていない。本図では、建物及び土堀が庭囲いを形成しており、門が2ヶ所に開かれている。「濱出門」は、川岸側に開かれていたと考えられる。一方、幕末期のFig. 2では、4ないし5棟の土蔵と見られる建物が庭を囲んでいるが、対岸の〈行事〉と同様の外観であり、

本図が郷御蔵所を正確に描いているとは言い難い。しかし、建物が庭囲いを形成することには変わりない。この庭囲いを敷地囲いと見ておく。

空間構成要素：Fig. 4 の敷地囲い及びその内側には、2 棟の御蔵の他に、「御役人部屋」と「御手代部屋」のある建物 (A)、「廻シ蔵」、「菰蔵」や「ツヅヲ蔵」^{注 20)}のある建物(B)、長井、平嶋、節丸といった各手永の「中出蔵」、稲荷社がある。廻し蔵は、廻し俵^{注 21)}の検査を行う計蔵^{注 22)}と考えられる。これに並んで検査に用いる筵を収納する菰蔵などがあつた。中出蔵は、年貢納入の中継のために設けられる蔵であり、加賀藩郷御蔵所でも見られた^{注 23)}。国作手永の中出蔵が見られないが、大橋村は同手永に属するため、後述するように同村内に中出し可能であつた。御蔵、A や B の建物、門は、藩の作事方による普請であつた^{注 24)}。一方、中出蔵は、手永による普請であり、両者の建物が混在していたことが知られる。さらには、敷地囲いの土塀や稲荷社は、「郡地方」の普請であつた。各蔵の正面に描かれている戸前空間は、通常下屋である^{注 25)}。

敷地外には、「御番所」や牢屋がある。牢屋も年貢徴収に関係があつた。長岡藩では、年貢を納められない米主などが郷御蔵所内の牢屋に拘留された^{注 26)}。これらの建物は藩の作事方の普請であるが、牢屋の塀は郡地方の普請であつた。

建物配置：建物配置は、Fig. 2 や Fig. 4 から知られる。方形の庭の 4 辺に建物が配置され、閉じた中庭を形成している。筆者は、過去の研究において郷御蔵所の建物配置を類型化し、このような建物配置を囲い込み型とした^{注 27)}。但し、建物が敷地囲いを形成する点は、郷御蔵所では確認できていない^{注 28)}。

Fig. 4 において門と各施設の位置関係を見ると、表門の近くには、藩の廻し蔵や長井・節丸手永の中出蔵がある。一方、濱出門の近くには、最大規模の御蔵や平嶋手永の中出蔵がある。役人部屋は、濱出門が表門であつた頃^{注 29)}は、門から見て右手にあつたが、表門設置後は、表門から離れて敷地奥になったと考えられる。手永の中出蔵が 2 棟あるが、離れて位置しており、藩の作事方の施設と手永の施設との間の区分は見られない。

3.2 〈八屋〉

立地：幕末期の「上毛郡八屋御茶屋・御蔵・牢屋・宿々御高札・御境石・壱里塚画図面」(Fig. 5) において〈八屋〉は、中津街道より海寄り、中津街道を横切って海へ注ぐ城根川の右岸に見られる。新田藩^{注 30)}の郷御蔵所である「御領分御蔵所」と隣り合っていた。これらの蔵所の川岸に「波戸」が描かれてあり、川幅が広がっていることから、河口近くに位置したと推測される。ここには、友枝、三毛門両手永の村々の年貢米が収められていた^{注 31)}。

成り立ち：友枝文書「天保十三寅ヨリ御用方日記帳」のうち、天保 15 年 (1844) 3 月「覚」に、1 番から 3 番までの室を有する御蔵 (桁行 9 間梁行 3 間)、4 番から 6 番までの室を有する御蔵 (桁行 11 間梁行 3 間)、7 番の室を有する御蔵 (桁行 4 間梁行 2.5 間)、2 戸前の反別蔵 (桁行 5 間梁行 2.5 間) が記されている。このうち 1 番から 3 番までの室を有する御蔵が解体になった^{注 32)}。反別蔵は麦を収納する蔵である^{注 33)}。友枝文書弘化 3 年 (1846) 6 月「八屋御蔵覚」にも、上記と同じ事柄が記されている。これに加えて、御廻蔵 (桁行 4 間梁行 2.5 間)、御郡屋 (桁行 7.5 間梁行 2.5 間)、三毛門手永中出蔵 (桁行 10 間梁行 3 間) が記されている。なお、郡屋は、小倉

Fig.4 A plan of Ohashi Go-Okura-syo which was drawn after the year 1822

城下に設けられた大庄屋の執務所であるが^{注 34)}、この場合郡方を統括する筋奉行の居所と思われる^{注 35)}。また、本書に、「御蔵地式」について東西 22 間、南北 17 間とある^{注 36)}。これは敷地と思われる。

1 番から 3 番までの室を有する御蔵は解体のままである。安政 7 年 (1860) 3 月 11 日の友枝文書「願ひ奉る口上の覚」には、7 番の御蔵が大破、解体の 1 番から 3 番までの室を有する御蔵を田野浦へ移したので、郡方の反別蔵、中出蔵を詰蔵として用いている旨が記されている^{注 37)}。同年 3 月 22 日には、三戸前の御蔵 (桁行 9 間梁行 3 間) の建築が決定されている^{注 38)}。幕末期の Fig. 5 の郷御蔵所に描かれている名称の記入のない 2 棟の建物は、桁行 9 間梁行 3 間 (1-3 番) 及び、桁行 11 間梁行 3 間 (4-6 番) の御蔵と考えられる。敷地囲い：郷御蔵所の姿は、Fig. 5 のみから知られる。囲いは部分的であり、〈八屋〉もまた建物が敷地囲いを形成していると見られる。門も 2 ヶ所あり、「御門」が街道へ向かって、「ウラ門」が波戸へ向かって開かれている。「御門」は前述の表門、「ウラ門」は濱出門と言える。以上は作事方の普請である^{注 39)}。

空間構成要素：Fig. 5 には、前記した建物が全て描かれている。反別蔵と中出蔵は「郡普請」とあり、それ以外は藩の作事方の普請である^{注 40)}。友枝手永の中出蔵が見られない理由は、〈大橋〉と同様、八屋村が友枝手永の村であつたことによると考えられる。なお、八屋村内には「中出し宿」があつた^{注 41)}。敷地外には、御番所がある。一方、牢屋は敷地囲いを形成しているように見えるが、Fig. 5 を詳しく見ると、庭との間に仕切りのような線が描かれおり、敷地外に

戸口が開かれていた可能性が高い。

建物配置：Fig. 5 の郷御蔵所に長さが記されていないので、友枝文書から知られる「御蔵地式」及び各建物の長さで建物配置を再現した (Fig. 6①②)。東西 22 間、南北 17 間の「御蔵地式」の中に全ての建物を収めようとする、窮屈である (①)。一方、門や堀の位置を上記の御蔵地式とすると (②)、見取図の建物配置に近くなる。従って、「御蔵地式」と御蔵所の範囲は、必ずしも一致しないと考えられよう。建物配置の型式は、Fig. 6 でも囲い込み型と見ることがができる。門と各施設の位置関係を見ると、表門の近くには、藩の廻し蔵や三毛門手永の中出蔵がある。一方、濱出門の近くには、最大規模の御蔵がある。役人部屋は表門から見て右手にある。

3.3 〈行事〉〈椎田〉

これらの郷御蔵所については、成り立ちや内容が知られる史料が乏しく、見取図も現存しないが、郡絵図や村絵図に描かれているので、立地、敷地囲いや建物配置の検討を行うことにする。

立地：京都郡行事村の〈行事〉は、〈大橋〉から見て行事川の対岸 (左岸) に位置した。幕末期と推定されている「大橋村行事村宮市村見取図」(Fig. 2) において〈行事〉は、周囲を畑などの空き地で囲まれ、川に近接している。本図の〈行事〉の表現は、〈大橋〉と同様であることを前述した。囲いの外に牢屋がある。築城郡の〈椎田〉に関しては、作製年不明の「築城郡絵図」(Fig. 7) において湊村の家並みより海側、城井川河口右岸に「御蔵所」と記されている。湊村は椎田村の隣村であり、両村の集落は幹線道路で結ばれている。以上、〈椎田〉は、湊村の集落の外れに位置し、川に近接していた。

敷地囲い：Fig. 2 の〈行事〉は建物のみで敷地囲いを形成しており、門が 1ヶ所開かれている。Fig. 7 の〈椎田〉も同様であるが、冠木門と建物の間に矢来垣が見られる。門は幹線道路へ向かって開かれている。これらも建物が敷地囲いを形成していたと見られる。

建物配置：「大橋村行事村宮市村見取図」(Fig. 2) に描かれる〈行事〉は、囲い込み型と見られる。Fig. 7 の〈椎田〉は、切妻屋根の棟が川に並行する 2 棟の建物及び、同上が川に直交する 4 棟の建物が庭を囲んでおり、これも囲い込み型と見ることができよう。これらの建物の種別は知られない。

3.4 〈宇島〉

立地：上毛郡の〈宇島〉は、藩政後期に設置された宇島港にあった。〈八屋〉に近く、これを補完する形で存在していたと考えられる。ここにも、友枝、三毛門両手永の村々の年貢米が収められていた^{注 42)}。

成り立ち：藩は赤熊村の洲地に築港することにし、文政 11 年(1828)に竣工した^{注 43)}。これに伴い郷御蔵所が設けられた。文政 13 年(1830)の「宇島海岸潮中満洲一分一間分限図」には、海中へ突き出た突堤状の土地の先端に、1 棟の「御土蔵」と 2 棟の「土蔵」、この御蔵群に続いて 2 棟の「御役所」と 1 棟の「御番所」が描かれている (Fig. 8)。

「社倉御蔵」を除くと、本図の中に他に御蔵は描かれていないので、突堤状の土地の大半が郷御蔵所と推定される。〈宇島〉は後発の郷御蔵所と言える。友枝文書天保 15 年 (1844) 3 月「覚」には、〈宇島〉に関する 3 戸前の御蔵 (桁行 18 間梁行 4 間)、2 戸前の御蔵 (桁行 10 間梁行 3.5 間)、2 戸前の御蔵 (桁行 6 間梁行 2 間) 都合 3 棟が記されている。弘化元年 (1844) の辛島文書「宇島港之図」の同所には、大型の 1 棟の「御蔵」、小型の 2 棟の「濱蔵」が描かれてあり

Fig.5 Hachiya Go-Okura-syo in the last days of the Tokugawa Shogunate. A part of drawing of the Nakatsu Road in the Koge County

Fig.6 A diagram for to study the building arrangement of Hachiya Go-Okura-syo

(Fig. 9)、Fig. 8 の 3 棟の御蔵に対応すると見られる。本図には、前記の 2 棟の役所や 1 棟の番所に加えて、1 棟の「中出シ蔵」が描かれている。これは、赤熊村が友枝手永であるので、三毛門手永の中出蔵である可能性がある。友枝文書弘化 3 年 (1846) 6 月「宇嶋御蔵覚」の御蔵も前記と同じ内容である。

敷地囲い：Fig. 8 や Fig. 9 の御蔵関連施設は、突堤状の土地の先端側を占めているが、郷御蔵所としての敷地境界は明らかでない。Fig. 8 では、町場の広小路が上記の先端まで通り、この道に各施設が面している。一方、Fig. 9 では、上記の道が御蔵群の手前で途絶えており、御蔵と御蔵の間は、空き地となっている。どちらの絵図も郷御蔵所としてのまとまりは見られない。

空間構成要素：御蔵、役所、番所、中出蔵が見られる。役所は、前述の役人部屋と見てよいだろう。一方、廻し蔵や反別蔵は見られない。御蔵の室の広さは、大蔵が 24 坪に対して小蔵は 17.5 坪や 6 坪であり、御蔵によってまちまちである。

建物配置：突堤状の土地に、倉庫部と管理部 (役所や番所) を分けて配置している。但し、中出蔵は管理部に位置している。ここでは、収納米を保管する詰蔵と中出蔵を明確に分けている。建物配置の型式の検討は難しいが、倉庫部に限ってみれば、蔵々が棟を平行関係にして配置される平行型^{注 44)}と見ることができよう。

3.5 〈新田藩八屋〉

小倉藩支藩・新田藩の領地は、上毛郡にあったことを前述した。その郷御蔵所は、本藩の〈八屋〉に隣接していた。ここで徴収された年貢は、小倉城内の新田藩の表蔵へ運ばれた。天保10年(1839)の「倉橋源兵衛日記」^{注45)}3月13日の条に、「一今日八屋御蔵所損場見分罷越、廉平・此助同伴、五番蔵西の方風破大損し、壺番・式番蔵右同断、三番蔵右二同し、四の蔵敷居朽損二付取替呉候(後略)」とあり、郷御蔵所に5つの蔵もしくは室があったことが知られる。幕末期の「上毛郡八屋御茶屋・御蔵・牢屋・宿々御高札・御境石・壺里塚画図面」(Fig. 5)には、郷御蔵所の建物などが描かれているが、建物の種別は知られない。

敷地囲いの手法及び、建物配置は、本藩の郷御蔵所に似ている。建物が敷地囲いを形成し、門は波戸側にも開かれていたと見られる(濱出門)。表門である「御門」の両脇の建物には、「へや」と記されており、役人部屋と推測される。建物配置の型式は、囲い込み型と見ることができる。

3.6 その他

仲津郡の〈沓尾〉は祓川河口右岸にあった^{注46)}。ここには、国作手永7ヶ村の年貢米が納められていた^{注47)}。御蔵以外に御番所があったことが知られる^{注48)}。その場所は明らかでない。蔵役人の存在が知られる^{注49)}、役所があった可能性が高い。「国作手永大庄屋日記弘化二年(1845)」9月8日の条に、手永内において廻し蔵(計蔵)における計立に関する注意が喚起されており^{注50)}、廻し蔵は〈沓尾〉においても必要な施設であったと考えられる。

田川郡の各郷御蔵所の実態が知られる史料は殆どない。但し、添田手永文書には以下の郷御蔵所に関する事柄が記されている。〈赤池〉は寛永10年(1633)、〈高原〉は貞享4年(1687)に創設された^{注51)}。文政3年(1820)、〈高原〉の諸役所1棟と御蔵3棟が糶村へ所替となった^{注52)}。諸役所(16間×2.5間)は糶手永、御蔵のうち2棟(12間×3間)は伊田手永、1棟(20間×3間)は添田手永が引き受けている。翌年、〈糶〉では、前年に伊田手永が建てた御蔵1棟(12間×4間)が風で倒れている^{注53)}。このように断片的な情報であり、郷御蔵所全体の様子は知られない。

4. 考察

4.1 共通性

郷御蔵所の実態が知られた京都郡、仲津郡、築城郡、上毛郡の郷御蔵所は、いずれも河口付近に立地した。これらの郷御蔵所の年貢米は海路を経て小倉城の表蔵へ運ばれたので^{注54)}、海運に便利な場所が選ばれたと推察される。

4.1.1 敷地囲い

囲い込み型の場合、郷御蔵所の殆どの建物が敷地囲いを形成したので、塀などの囲いは部分的に見られる程度である。このことは支藩でも同じである。見取図が現存する〈大橋〉〈八屋〉〈新田藩八屋〉では、門が2ヶ所あり、そのうち波止場へ向かって開かれている方は、〈大橋〉において「濱出門」と呼ばれるように、主として小倉廻し時など、船での積み出しに用いられたと考えられる。また、年貢米搬入時の混雑を防止する上でも複数の門が必要とされた^{注55)}。

4.1.2 空間構成要素

Table1は、史料から知られる各郷御蔵所の空間構成要素を一覧表にしたものである。〈行事〉と〈椎田〉については、郷御蔵所の空間

Fig.7 The Shiita Go-Okura-syo which was drawn on the "Tsuikigun-ezu"

Fig.8 The Go-Okura-syo of the Unoshima Port in the year 1830

構成要素が知られる史料がない。これらの郷御蔵所を除くと、藩の作事方が整備した役人部屋や廻し蔵については、確認できた郷御蔵所が多く、標準的な施設であったと考えられる。中出蔵についても、郷御蔵所の立地する村が含まれない手永が設けたと考えられよう。番所は必須であったが、囲いの外に位置した。なお、他藩において番所は、敷地内に設けられることが多かった^{注56)}。

4.1.3 建物配置

小倉藩郷御蔵所の建物配置の型式の標準は、囲い込み型と言える。支藩の〈新田藩八屋〉も囲い込み型であった。一方、藩政後期に設置された後発の〈宇島〉は、郷御蔵所の体を成してなかった。その

理由は、御蔵及び関連施設が波戸と繋がる突堤状の土地に設けられたことにあるだろう。各施設は、「波戸道」に沿っていた。敷地囲いはないが、御蔵のある地区への出入りは、1ヶ所に限られるので、ここに番所を設けて、人や物の出入りを監視したと推察される。

囲い込み型で、各施設の配置が知られるのは、〈大橋〉と〈八屋〉のみであった。これらに共通する空間構成は、第一に、藩の廻し蔵が表門の近くに、位置する。第二に、手永の中出蔵も門の近くに位置する。以上の点があげられる。

4.2 共通性の要因

4.2.1 建物が敷地囲いを形成する要因

筆者のこれまでの研究において建物が敷地囲いを形成する事例は、城内の御蔵所に見られる程度であった^{注57)}。通常の郷御蔵所は、敷地境界に柵や垣が設けられ、これらのみで敷地囲いを形成していた^{注58)}。また、敷地が堀で囲まれる郷御蔵所もあった^{注59)}。〈大橋〉や〈八屋〉に関する見取図 (Fig. 4, 5) には、敷地境界線が描かれていない。〈大橋〉の場合、境界に設けられる堀に対して、西蔵は背面がこれと同一線上にあるが、廻し蔵や中出蔵は前面が同一線上にあり、建物の背面を敷地境界とすると、凹凸の多い不自然な敷地形状となる。なお、郷御蔵所全体の坪数が記される史料は見られない。前掲「国作手永大庄屋日記弘化二年 (1845)」、大久保嘉右衛門が大庄屋へ宛てた7月14日の文書では、〈大橋〉の御蔵の建て替え及び増築に際して、東御蔵は外部へ向かって梁行1間の拡張、西御蔵も外部へ向かって1室分の拡張が計画され^{注60)}、「定而地盤通り」とあった。この地盤は既存建物の地盤であり、その位置の変更がないことを述べていると考えられよう。前述の〈八屋〉の「御蔵地式」に関する検討では、堀及び門の位置を敷地境界と見た場合、この範囲を超える蔵がある (Fig. 6②)。このように敷地境界は明確でない。

藩の「永引規定」^{注61)}によれば、御茶屋や郡屋などが「屋敷成引」に対して、郷御蔵所は「御蔵床引」や「中出蔵床引」であった。この御蔵床について検討する。友枝文書慶応4年 (1868) の「覚」^{注62)}には、「一八屋御茶屋御蔵牢屋 但し、地面にて作事・地方と色分け 絵図引き申すべし」とあり、各建物が地盤によって区分されていたと推測される。友枝文書安政7年 (1860) 3月22日御郡方役所が大森平次右衛門へ宛てた文書には、「八屋御蔵新規出来の儀、(中略) 地盤治定の通り、横三間・長さ九間、三戸前にて取り建て給うべきとの義に付、(後略)」とあり^{注63)}、地盤を優先して御蔵が計画されていたことが窺える。

部分的な囲いは、〈大橋〉の場合土堀で郡方が普請していた。一方、〈八屋〉の場合作事方の普請であった。このように囲いを普請や修繕する主体は郷御蔵所によって異なる。主体の負担は囲いの長さに比例するので、建物を敷地囲いに用いれば、囲いの負担を最小限に止められる利点がある。なお、郡方は郡土蔵も管轄していた。

以上のことから、建物を敷地囲いに用いる要因として、御蔵床の存在及び、囲いの省略があげられる。なお、小倉藩の場合番所が囲いの外に位置したが、これは御蔵が外部に面するので、御蔵の外部側の防犯に配慮する必要があったことによると推察される。

4.2.2 囲い込みの要因

筆者は、加賀藩郷御蔵所に関する過去の研究において、囲い込み型の形成要因の一つとして、領民の蔵の存在をあげた^{注64)}。小倉藩郷御蔵所においても手永の中出蔵があった。囲い込み型の特徴は、

Fig.9 The Go-Okura-syo of the Unoshima Port in the year 1844

Table1 A list of the elements of the Go-Okura-syo owned by the Kokura Domain and Shinden Domain located in villages and a town

Name of Go-okura-syo	Inside					Outside	
	Okura	Inspection station	Office	Tanbetsu-kura*1	Nakadashi-kura*2	Guard house	Jail
Ohashi	○	○	○		○	○	○
Hachiya	○	○	○	○	○	○	○
Gyozi	○						
Shiita	○						
Unoshima	○		○		○	○	
Shinden-nan	○		△				
Hachiya							
Kutsuo	○	△	△			○	

Note)*1:Storehouse to stock wheat or barley *2:Storehouse for Tenaga in which is organization of villages △:by inference

中庭が形成される点であるので、本稿では中庭利用の観点から検討する。文献1)には、当時の上納手続き及び収納手続きが詳しく記述されている^{注65)}。これによれば、搬入された米俵は、庭に敷き並べた筵の上に一列ないし数列に並べられた。検査は、一つ目に俵装の確認、二つ目に差し子2名による「干乾、製米、各種混同米」の確認、三つ目に、斤量役方による計量^{注66)}である。なお、二つ目の検査は、前述の廻し俵の検査と考えられる。明治初期の〈八屋〉には500枚の庭筵が貯えられており^{注67)}、検査では庭を広く用いていたと推測される。「国作手永大庄屋日記弘化二年 (1845)」9月8日の条に、「一、郷御蔵々口番所日々取立候筵米之儀者庭仕舞吟味役立合見札之上、(中略) 納米相層候へ者蔵入夜二入候義有之見札方行届兼候次第も可有之段相聞候二付、当年より庭内見通宜場所江筵米取集納米差入相済候度々吟味役外目見届候を帳面二相記調印致候様取計、若筵米持運ひ方不審之義も候ハ、(後略)」とあり、筵にこぼれ落ちた米を筵米と呼び、これも取り立てるため、役人が厳しく監視したことが知られる。また、同日記嘉永元年 (1848) 11月16日の条、大久保嘉右衛門から仲津郡大庄屋中へ宛てた文書に、「大橋御蔵納米付出而無之二付、庭も立不申との趣、此天氣甚残念二存候、(中略) 晴天二不拘日々付出候様 (後略)」とあり、搬出時にも庭の設えが必要であったことがわかる。さらに、同日記嘉永7年 (1854) 9月17日

の条「覚」に、「一御蔵所庭内ニ而米拂共刎俵杯ニ色々輕敷手業有之趣不届之事ニ付見当り次第直ニ入牢可申付候事」とあり、米払役^{注68)}の不正にも注意を払う必要があった。

以上のことから庭は、納入及び付出の中心部であり、広さを確保するとともに、多くの筵を敷き詰めやすく、死角のない形状とする必要があったと考えられる。このためには、整形の中庭は好都合である。また、検査時や収納時、米俵の運搬効率を上げるには、全ての蔵を庭に面するように配置するのが最もよい。このことは、手永の中出蔵も同じである。つまり、囲い込みの要因として、藩や手永による庭の共有及び、庭を中心とした年貢徴収があげられる。

5. まとめ

本研究は、藩政後期の小倉藩の郷御蔵所について以下のことを明らかにした。

内陸の田川郡の郷御蔵所を除くと、郷御蔵所は、河口付近の平地に立地した。徴収された年貢米は、海路を経て小倉城の表蔵や大坂蔵屋敷へ運ばれた。

これらの郷御蔵所の建物配置の型式は、囲い込み型が占めた。なお、支藩の郷御蔵所も囲い込み型であった。しかし、建物が敷地囲いを形成する点が他藩の囲い込み型とは異なっていた。小倉藩の場合、塀などの囲いは最小限であった。郷御蔵所には藩の作事方による普請の御蔵、廻し蔵（計蔵）、役人部屋、郡方や手永による普請の中出蔵があった。中出蔵は、年貢納入の中継施設であるが、手永が用いる蔵で、藩の収納蔵でない点に加賀藩の中出蔵とは異なっている^{注69)}。郡方の普請によって反別蔵が設けられることもあった。他藩では敷地内に設けられることが多い番所は、囲いの外に設けられた。一方、藩政後期の築港に伴って設けられた〈宇島〉は、突堤状の土地に設けられた特異な事例であり、囲いがなかった。囲い込み型には、廻し蔵が表門、中出蔵が門の近くに位置するなどの共通性も見られた。

前述の共通性の要因について検討した。第一に、建物が敷地囲いを形成する点については、要因として、御蔵床の存在及び、囲いの省略があげられた。第二に、囲い込みの点については、藩や手永による庭の共有及び、庭を中心とした年貢徴収があげられた。囲い込み型の郷御蔵所は、藩民双方にとって使いやすいように配慮されていたのである。

以上、管理主体の異なる建物で囲いを形成した小倉藩の郷御蔵所は、囲いの中に建物が配置される通常の郷御蔵所とは成り立ちが異なるものであり、我が国の郷御蔵所において特異な事例と位置づけられる。九州地方には、本州と異なる空間構成の郷御蔵所が見られたので、今後も九州地方の他藩の郷御蔵所に注目し、御蔵所の空間構成に関する研究を進めていきたいと考えている。

謝辞

本研究の史料調査では、みやこ町歴史民俗博物館の木村達美氏、豊前市求菩提資料館の相良悦子氏、行橋市教育委員会の笠置拓也氏、築上町教育委員会の馬場克幸氏、北九州市立自然史歴史博物館の守友隆氏、九州大学記録資料館の梶嶋政司氏に大変お世話になった。他ご協力いただいた方々に深く感謝申上げる。

参考文献

- 1) Edited by editorial board of “History of Shiita Town” : Shiitatyoshizyokan (History of Shiita Town), Vol.1, Shiita Town, 2005
椎田町史編纂委員会編:椎田町史上巻, 椎田町, 2005
- 2) Fukuoka Pref. : Fukuokakenshishiryō (History of Fukuoka Pref. , source book), Vol. 9, Fukuoka Pref. , 1938
福岡県:福岡縣史資料第9輯, 福岡県, 1938
- 3) Edited by editorial board of “History of Toyotsu Town” : Toyotsutyoshizyokan (History of Toyotsu Town), Vol.1, Toyotsu Town, 1998
豊津町史編纂委員会編:豊津町史上巻, 豊津町, 1998
- 4) Sagami, C.: Spatial Structures of Gogura-syo Located in the Echigo Province in the Edo Period, Journal of Architecture and Planning (Transaction of AIJ), Vol. 77, No. 675, pp. 1179-1186, 2012. 5 (in Japanese)
- 5) Sagami, C.: Principles of Spatial Structures and Regional Characteristics of Okura-syo Owned by the Kaga Domain in the Edo Period -By the Analysis of the Extension Method-, Journal of Architecture and Planning (Transaction of AIJ), Vol. 82, No. 732, pp. 507-517, 2017. 2 (in Japanese)
- 6) Edited by an investigation room for buried cultural property at Educational Cultural Corporation of Kitakyusyu City: Kokurazyo-okuraato (Remains of Okura in the Kokura Castle, a report on the investigation of cultural property in Kitakyusyu City, Vol. 228), An investigation room for buried cultural property at Educational Cultural Corporation of Kitakyusyu City, 1999
北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室編:北九州市埋蔵文化財調査報告書第228集小倉城御蔵跡, 北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室, 1999
- 7) Sagami, C.: Spatial Structures of Okura-syo Owned by the Kaga Domain Located in the Etyu Province in the Edo Period, Journal of Architecture and Planning (Transaction of AIJ), Vol. 77, No. 676, pp. 1471-1478, 2012. 6 (in Japanese)
- 8) Sagami, C.: Spatial Structures of Okura-syo Owned by the Kaga Domain Located in the Noto Province in the Edo Period, Journal of Architecture and Planning (Transaction of AIJ), Vol. 77, No. 682, pp. 2865-2872, 2012. 12 (in Japanese)
- 9) Sagami, C.: Spatial Structures of Okura-syo Owned by the Kaga Domain Located in the Kaga Province in the Edo Period, Journal of Architecture and Planning (Transaction of AIJ), Vol. 79, No. 705, pp. 2517-2526, 2014. 11 (in Japanese)
- 10) Sagami, C.: Study on Spatial Structures of Okura-syo Owned by the Kumamoto Domain in the Edo Period (Vol. 1) -The Characteristics of Spatial Structures of Okura-syo and the Formation Factors-, Journal of Architecture and Planning (Transaction of AIJ), Vol. 84, No. 759, pp. 1209-1219, 2019. 5 (in Japanese)
- 11) Sagami, C.: Spatial Structure of Okura-syo Owned by the Nagaoka Domain Located in the Shinano River Basin in the Edo Period, Journal of Architecture and Planning (Transaction of AIJ), Vol. 76, No. 669, pp. 2191-2197, 2011. 11 (in Japanese)
- 12) Sagami, C.: Study on Spatial Structures of Okura-syo Owned by the Yanagawa Domain in the Edo Period, Journal of Architecture and Planning (Transaction of AIJ), Vol. 85, No. 771, pp. 1079-1088, 2020. 5 (in Japanese)
- 13) Sagami, C.: Spatial Structures of Okura-syo Owned by the Tottori Domain in the Edo Period, Journal of Architecture and Planning (Transaction of AIJ), Vol. 81, No. 724, pp. 1373-1383, 2016. 6 (in Japanese)
- 14) Sagami, C.: Spatial Structures of Okura-syo Owned by Daisyoji Domain Located in the Kaga Province in the Edo Period, Journal of Architecture and Planning (Transaction of AIJ), Vol. 83, No. 752, pp. 1989-1997, 2018. 10 (in Japanese)

- 15) Edited by editorial board of “History of Buzen City” :
Buzenshishimonzyoshiro (History of Buzen City, source book),
Buzen City, 1993
豊前市史編纂委員会編:豊前市史文書資料, 豊前市, 1993
- 16) Edited by a society to study the history of ordinary people at
Human Rights Center of Buzen City: Tomoedamonzyoshirosyu
(a source book on Documents of Tomoeda family), Vol. 2,
a society to study the history of ordinary people at Human Rights
Center of Buzen City, 2011
豊前市人権センター庶民史研究会編:友枝文書史料集 2, 豊前市人権セン
ター庶民史研究会, 2011
- 17) Edited by editorial board of “History of Buzen City” :
Buzenshishizyokan (History of Buzen City), Vol. 1, Buzen City, 1991
豊前市史編纂委員会編:豊前市史上巻, 豊前市, 1991
- 18) Edited by Matsushita, S.: Nanakumashiryososo (a series of
Nanakuma Historical Materials), Vol. 6, a publishing association
of Nanakuma Historical Materials, 1971
松下志朗編:七隈史料叢書第6巻, 七隈史料刊行会, 1971
- 19) Fukuoka Pref. : Fukuokakenshishiryō (History of Fukuoka Pref.
, a source book), Vol. 8, Fukuoka Pref. , 1937
福岡県:福岡県史資料第8輯, 福岡県, 1937
- 20) Edited by editorial board of “History of Yukuhashi City” :
Yukuhashishishichukan (History of Yukuhashi City), Vol.2,
Yukuhashi City, 2006
行橋市史編纂委員会編:行橋市史中巻, 行橋市, 2006

注

- 注 1) 文献 1), p. 705
- 注 2) 「豊前旧租要略」(文献 2), pp. 658-726 所収) 但し、本書に宇島御蔵所は記されていない。
- 注 3) 小倉城の表蔵は、本蔵や刎橋蔵とも呼ばれた。なお、Fig. 5 の八屋御蔵所に「御表御蔵所」とあり、表蔵の呼称は在郷の御蔵所においても用いられた。
- 注 4) 文献 3), p. 1053
- 注 5) 後掲注 22)
- 注 6) 文献 4) 筆者は、近世期の越後国の郷蔵所について検討した。
- 注 7) 文献 5), pp. 509~511 本稿において筆者は、各御蔵所の増築過程を図示した。
- 注 8) 文献 3), pp. 1054-1055 郡土蔵は、農村の救済や融通に大きな役割を果たしたと言われる。
- 注 9) 社会は、京都郡の行事村、仲津郡の大橋村、上毛郡の宇島といった郷御蔵所が設けられた村などに確認できる。
- 注 10) 文献 6), pp. 341-345
- 注 11) Fig. 2 に村域を示す文字を加筆した。大橋村の村域にある郷御蔵所は〈大橋〉と考えられている。
- 注 12) 「国作手永大庄屋日記文久四年(1864)」, 行橋市教育委員会蔵 本書の9月3日の条「覚」に、〈大橋〉に納入する大橋村を始めとする7ヶ村が記されている。
- 注 13) Fig. 3 は刎が納められている室を示す目的で描かれたものと推察される。刎が納められていない御蔵は省略された可能性がある。室番号の並びから「三番蔵」と「六番蔵」の間をつなぐように刎が納められていない「四番蔵」と「五番蔵」による一棟があり、この棟は、後述する表門設置のため取り壊されたと考えられよう (Fig. 4)。
- 注 14) 「国作手永大庄屋日記文政五年(1822)」, 行橋市教育委員会蔵
- 注 15) Fig. 3 の東の御蔵は、西の御蔵と同規模であり、桁行12間、梁行4間と考えられ、「奉願覚」の御蔵の大きさに一致する。このことから、東側の御蔵の番号のない室は、「一番蔵」「二番蔵」と見るのが妥当であろう。なお、このように見れば、前掲注 13) で述べた室番号の並びも自然である。
- 注 16) 前掲注 14)
- 注 17) 「国作手永大庄屋日記弘化二年(1845)」, 行橋市教育委員会蔵
- 注 18) 前掲注 17) 本書7月28日付、西正左衛門が大庄屋へ宛てた文書に、「大橋両御蔵共ニ当年者仲津郡へ引受普請致候約速ニ相成居候様覚江候、(後略)」とある。これに続く7月29日付の文書に、「秋冷相催候、然者大橋御蔵御治定ニ相成候由ニ付、(後略)」とある。

- 注 19) なお、西側の御蔵については敷地外の御番所を移動させれば南側へ増築可能で、増築される一室は丁度よく収まり (Fig. 4)、土塀が省略できる。東側の御蔵についても、背後への拡張が可能である。このことで郷御蔵所の空間構成は、完結したと考えられる。
- 注 20) 文献 3), p. 1053 では、「ウバヲ」と読んでいる。これらの意味は不明。
- 注 21) 検査のため抽出された米俵のこと。
- 注 22) 前掲注 17) 本書9月8日の条、横川道蔵の文書に、「当秋より郷御蔵於計蔵廻し俵計立之節、(中略) 右ニ付口番所之者計蔵江も無遠慮立入不宜取計方も有之候ハ、見聞之次第可申出候、(後略)」とある。
- 注 23) 文献 7), p. 1471 加賀藩郷御蔵所は、本御蔵所と中出御蔵所に分類され、前者は詰蔵として、後者は詰蔵への中継所を目的として設置された。
- 注 24) 図版出典 Fig. 4
- 注 25) 熊本市南区川尻や宇土市馬之瀬町には熊本藩御蔵の、鳥取県東伯郡湯梨浜町橋津には鳥取藩御蔵の建築遺構がある。これらの戸前空間は下屋である。
- 注 26) 文献 11), p. 2192 一方、小倉藩の年貢徴収と牢屋との関連について述べた文献は見られない。慶応4年(1868)の友枝文書「申し上げ候覚」(文献 16), pp. 59-60 掲載) に、郡方役所の牢屋に入牢の者が〈八屋〉の牢屋へ移されたことが記されており、年貢徴収のみに関わる牢屋とは言い難い。合理的な地方支配の観点から藩の施設を集めて運営していたと思われる。
- 注 27) 文献 7), p. 1472
- 注 28) 文献 12), p. 1081 前稿で検討した同じ九州地方における柳川藩郷御蔵所の囲い込み型〈田町〉では、堀が敷地囲いの役割を果たしていた。
- 注 29) 前掲注 16)
- 注 30) 新田藩は、上毛郡26ヶ村を領した。
- 注 31) 友枝文書、九州大学記録資料館蔵 本書の弘化2年(1845)9月「八屋納めの村々友枝手永」に、八屋村始め8ヶ村、「同三毛門手永」に、11ヶ村が記されている。
- 注 32) 本書に、「一長九間横三間 土蔵壹軒 一二三番 但、三戸前、一戸前五百石積宛 右御蔵解体相成居申候」とある。
- 注 33) 文献 3), p. 690
- 注 34) 文献 15), p. 489 但し、企救郡の郡屋は篠崎村にあった。
- 注 35) 前掲注 34) 領内6郡の筋奉行は、御郡様と呼ばれていた。
- 注 36) 本書に、「一東西式拾式間南北拾七間 御蔵地式」とある。
- 注 37) 文献 16), pp. 55-56 掲載。本書に、「(前略) 御米御取り納めの節は、御郡より御建て方に相成り居り候反別蔵・中出蔵等相用い、是迄仮成り御間に合わせ来り申し候、(後略)」と読み下されている。
- 注 38) 「友枝手永大庄屋日記安政七年(1860)」 本書の3月22日の条、郡方役所が大森平次右衛門へ宛てた文書に、「八屋御蔵新規出来の儀、(中略) 地盤治定の通、横三間・長九間、三戸前二て取建可給との義ニ付、(後略)」とある。
- 注 39) 図版出典 Fig. 5
- 注 40) 前掲注 39)
- 注 41) 「友枝手永大庄屋日記慶応三年(1867)」 本書10月29日の条、御蔵番傳三郎が作成した「御届申上候覚」に、「一私義御年貢米中出宿仕候処、居家手狭ニ御座候て雨天の節差支申候間、御蔵所脇空地へ御米中出家取建申候処、御蔵近辺にて、第一火ノ元不用心ニも有之、(後略)」とある。
- 注 42) 前掲注 31) 本書の弘化2年(1845)9月「宇嶋納め村々」に、友枝手永赤熊村始め5ヶ村、三毛門手永7ヶ村が記されている。
- 注 43) 文献 17), p. 901
- 注 44) 文献 7), p. 1472 本稿において筆者は、越中国の加賀藩郷御蔵所を、平行型、囲い込み型、L型に類型化した。
- 注 45) 文献 15), pp. 338-383 所収 倉橋源兵衛は、新田藩郡役を務めた。
- 注 46) 「杵尾村北西絵図」, 明治5年(1872)頃, 原因の所在不明 本図の龍日賣大神社の隣地、祓川沿いの土地に「御蔵所」と記されている。
- 注 47) 前掲注 12)
- 注 48) 「国作手永大庄屋日記嘉永元年(1848)」9月27日の条。
- 注 49) 前掲注 48)
- 注 50) 前掲注 22)
- 注 51) 「高原赤池御蔵之事」(文献 18), pp. 179-180 所収), 文政3年(1820)
- 注 52) 「楠村へ高原御蔵御所替之事」(文献 18), p. 181 所収) 文政3年(1820)10月の添田手永文書「演説申上覚」に、「一当年楠村江仮御蔵出来仕候ニ付(後略)」とあることなどから、この年に所替が行われたと考えられる。
- 注 53) 「楠御蔵建方入用入足」(文献 18), pp. 182-183 所収) に、「文政四巳七

月晦日之大風ニ糶御蔵去年伊田手永より建候四間ニ拾貳間之蔵風倒申候
(後略)」とある。前掲注 52) より梁行が 1 間長い、伊田手永が引き受けた御蔵と見てよいだろう。

注 54) 小倉廻しや小廻しと呼ばれた。また、廻米として直接郷御蔵所から大坂蔵屋敷へ廻漕されることもあった。

注 55) 前掲注 16)

注 56) 郷御蔵所敷地内の番所は、加賀藩(越中国)の場合敷地囲いが明らかな 1 4 ヶ所のうち 1 0 ヶ所(文献 7), p. 1473)、鳥取藩の場合番所が確認できた 4 ヶ所(文献 13), p. 1376) うち 3 ヶ所で見られる。

注 57) 加賀藩小松城の 3 ヶ所の御蔵所(文献 9), p. 2519)、鳥取藩米子城東西 2 ヶ所の御蔵所(文献 13), p. 1378) があげられる。

注 58) 文献 13), p. 1376

注 59) 文献 14), p. 1990

注 60) 前掲注 19)

注 61) 「豊前旧租要略」(文献 19), pp. 548-632 所収) 永引とは、年貢の賦課対象である土地から、毎年一定の面積を除外しておくことである。本書に、「御蔵床引并ニ中出蔵床引ハ、田川郡ニ数村アリ。貢米蔵又ハ貢米中出シヲスル土地ノ引ナリ。」とあり、御蔵の地盤の永引が実行されたのは田川郡の一部であった。

注 62) 文献 16), p. 58 所収 但し、読み下し文。

注 63) 文献 16), p. 56 所収 但し、読み下し文。

注 64) 文献 5), p. 514

注 65) 文献 1), pp. 706-707

注 66) 全ての米俵が対象になった。

注 67) 「友枝手永大庄屋日記明治四年(1871)」 本書 9 月 8 日の条、八屋御蔵諸品仕継書上帳の写しに、「一庭蒔五百枚」とある。

注 68) 米払役は、村が囑託した。

注 69) 前掲注 23)

図版出典

Fig. 1 筆者作製

Fig. 2 行橋市指定有形文化財「大橋村行事村宮村見取図」、行橋市教育委員会蔵。作製年は、文献 20) (口絵) が幕末期と推定している。各村域がわかりやすく色分けされている。家屋敷については家主名を記し、御蔵、社倉、社寺については建物を描いている。(大橋)は、南北方向より東西方向が長い、Fig. 4 の見取図では逆である。また、郷御蔵所の表現は、(行事)と似通っており、郷御蔵所を正確に描いたものとは言い難い。

原図の写真に、解説文字、() の文字、記号、方位を記入した。なお、() の文字は筆者が補ったものである(以下同じ)。

Fig. 3 行橋市指定有形文化財「国作手永大庄屋御用日記」、行橋市教育委員会蔵 本書の文政 5 年(1822) 1 月 18 日の条に描かれている「御蔵絵図面差出候扣」。本書に「(前略) 初蔵絵図其外御用方御書付被遣委細致承知候然ル所御蔵一ト戸前之内ニ何程之初高俵数何程但四斗入と書候御書付被遣有之候(後略)」とある。本図によれば当時、3 番と 6 番の室に寛政元年(1789)の初、7 番と 8 番の室に文化 10 年(1813)の初が納められていた。

原本の複写物に、解説文字を記入した。

Fig. 4 福岡県指定有形文化財小笠原文庫「大橋村御茶屋・御蔵所・牢屋・高札場・境石・皆見村一里塚図」、作製年不明、福岡県立育徳館高等学校錦陵同窓会蔵／みやこ町歴史民俗博物館寄託。 本図には、表題の施設が並べて描かれている。各施設とも各部が、「御作事方普請」、「御郡地方普請」、「手永普請」に色分けされている。御茶屋は、手永普請の部分がなく、建物以外の工作物(土塀、竹垣、杉垣)のみで敷地囲いを形成している。牢屋は、御番所から見て南西方向に描かれている。

原図の写真に、解説文字、記号、凡例を記入した。

Fig. 5 辛島文書「上毛郡八屋御茶屋・御蔵・牢屋・宿々御高札・御境石・壱里塚面図面」、求菩提資料館蔵 作製年は、文献 17) (p. 970) が幕末期と推定している。本図は、上毛郡における中津街道沿いの藩の施設や家並みなどを描いている。八屋村には、2 ヶ所の郷御蔵所、御茶屋や高札場が描かれており、同村が当地域の中心地であったことがわかる。藩の施設の建物及び囲い、工作物が、「御作事方御普請分」と「郡普請之分」に色分けされている。

原図の写真に、解説文字、() の文字、記号を記入した。

Fig. 6 筆者作製 縮尺は、1 間を 1 ミリメートルとした。2 棟の御蔵の位置については、桁行の短い 1-3 番の室を有する御蔵を西端に配置する方が収

まりがよい。友枝文書弘化 3 年(1846) 6 月「八屋御蔵覚」などによれば、1-3 番及び 6 番の各室は 500 石積、4-5 番の各室は 700 石積であるので、前者を間口 3 間奥行 3 間、後者を間口 4 間奥行 3 間として作製した。

Fig. 7 「築城郡絵図」、作製年不明、築上町教育委員会蔵。本図には、郡内の山、河川、道路、家並み、社寺、海岸林などが描かれ、各村名が記されている。幹線道路は、赤色の二重線で強調されている。建物については、湊村付近において御蔵と町屋は同じ表現であり、簡略化されていると見られる。築上町教育委員会提供の原図の写真に、解説文字、() の文字を記入した。

Fig. 8 小笠原文庫「宇島海岸潮中満洲一分一間分限図」、文政 13 年(1830)、福岡県立育徳館高等学校錦陵同窓会蔵／みやこ町歴史民俗博物館寄託。同じ内容の同年「潮中満測量一分一間分限絵図」(求菩提資料館蔵)があり、本図は測量成果物の一つと考えられる。宇島築港直後の港や町場の様子が知られる貴重な資料と言える。

みやこ町歴史民俗博物館デジタルミュージアム掲載写真に、解説文字、記号、方位を記入した。

Fig. 9 辛島文書「宇島港之図」、弘化元年(1844)、求菩提資料館蔵。本図は、宇島港の概要を描いたものであるが、社倉を図の中心とし、これを実際より大きく詳しく描いている。従って、社倉以外は、測量成果による Fig. 8 に比べて精度に欠ける。しかし、藩政後期の郷御蔵所の施設が知られる貴重な史料である。

原図の写真に、解説文字、記号、方位を記入した。

本研究は、科研費(18K04551)の助成を受けたものである。

STUDY ON THE SPATIAL STRUCTURES OF GO-OKURA-SYO OWNED BY THE KOKURA DOMAIN IN THE LATE EDO PERIOD

Chikao SAGAMI^{*1}

^{*1} Prof., Dept. of General Engineering, National Institute of Technology, Sendai College, Dr.Eng.

Chapter 1: The purpose of this study is to identify the characteristics of spatial structures of Go-Okura-syo (Okura-syo established in Go) owned by Kokura Domain in the late Edo period. There were Nakadashi-kura that Tenaga (meaning "hand's length"; a unit of local administration formed by different villages) used in the Go-Okura-syo and the Go-Okura-syo was formed by both public and private Tenaga. Therefore, it was assumed that this Go-Okura-syo was built differently than other Go-Okura-syo of different domains.

Chapter 2: Previous researches and the procedure of this study are shown. There were no architectural remains of the Okura available, so it was examined using picture maps and historical papers about Tenaga.

Chapter 3: Actual spatial structures (site location, how they were built, site enclosure, factors of spatial structures, building arrangement) were shown for each Go-Okura-syo.

Chapter 4: The regularity of the spatial formation and the type of the building arrangement were determined. Firstly, most of the buildings in the Go-Okura-syo served as a site enclosure, so fences and other types of enclosure were just used partially. Secondly, besides Okura, other components such as an office, which was organized by Sakujikata of the domain, an inspection station, and Nakadashi-kura used by Tenaga were essential to the Go-Okura-syo. A guard house was positioned outside of the enclosure while it was usually established within the site in other domains. Thirdly, the standard type of the building arrangement was an enclosure type. The same applies to other Go-Okura-syo in the subsidiary domains.

Next, we examined the possible factors of buildings serving as a site enclosure and the reasons why it was enclosed. For the former, it was considered that there was no definite boundary in the Go-Okura-syo, and there was a specific footing called "Okura-Toko" in Okura. Also, using buildings as a site enclosure has an advantage to minimize the burden of making enclosure. Therefore, the existence of Okura-Toko and omitting to create enclosure were cited as the possible factors of using buildings as a site enclosure. For the latter, as a garden was a central area for delivery, they needed to have as wide a garden as possible and it should be the shape with no blind side. Also, to improve the efficiency for transporting rice bales when inspecting and putting them away, the best way was to place all the Kura facing to the garden. As a result, the possible factors for the enclosure were sharing the garden among the domain and Tenaga and collection of agricultural taxes mainly in the garden.

Chapter 5: In conclusion, it was considered why the Go-Okura-syo in Kokura domain had the characteristic spatial structures. The Go-Okura-syo owned by Kokura domain with the different buildings with different custodians serving as an enclosure was considered a unique case in Japan's Go-Okura-syo.

(2020年2月4日原稿受理, 2020年4月21日採用決定)